

日本英文学会中部支部 第63回大会プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日 時

2011年10月29日(土)・30日(日)

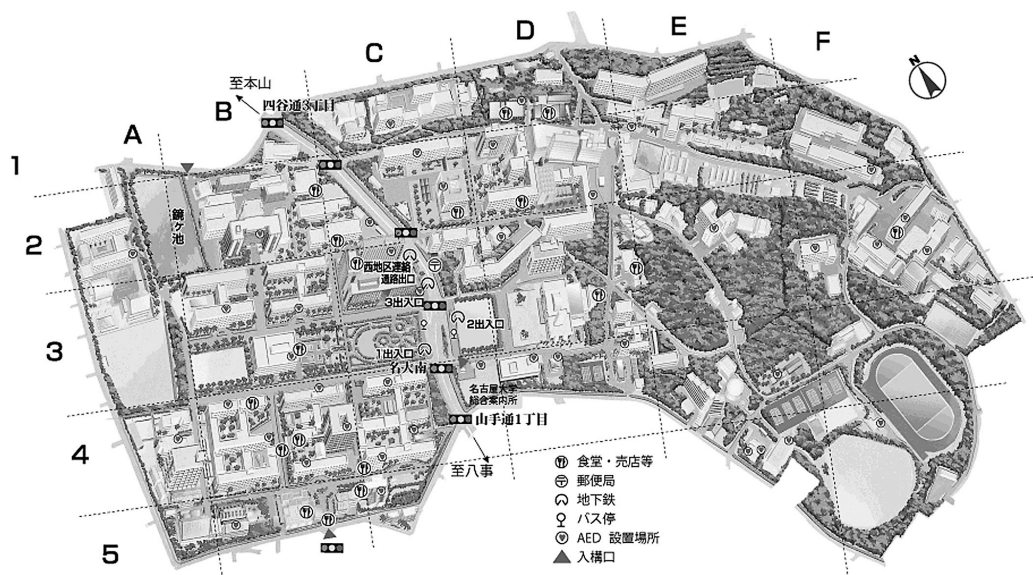
場 所

名古屋大学 東山キャンパス 文学部・文系共同館

〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町

TEL: 052-789-5111(代表)

<http://www.nagoya-u.ac.jp>



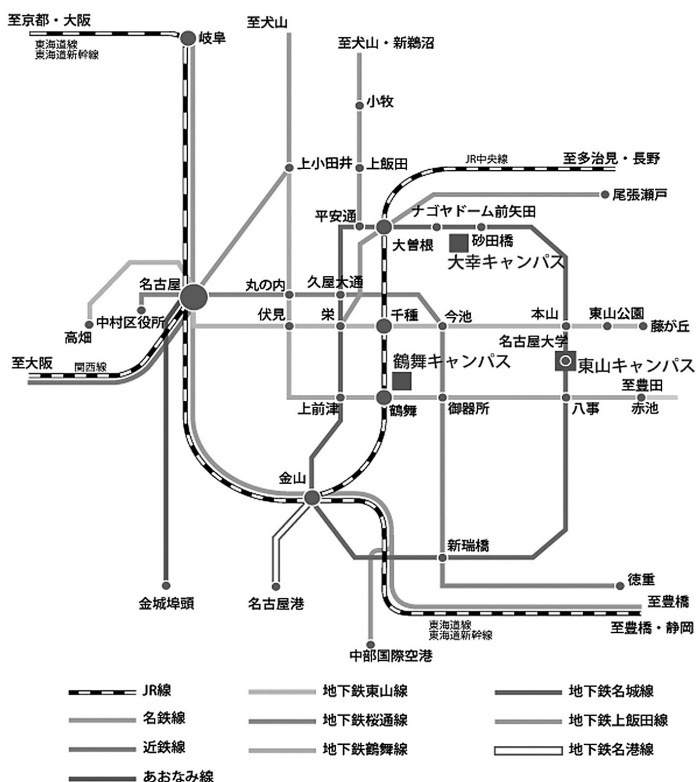
主催 日本英文学会中部支部

交通のご案内

■鉄 道

地下鉄名城線名古屋大学駅1番出口から会場まで西へ徒歩3分。

- JR名古屋駅・名鉄新名古屋駅・近鉄名古屋駅からの場合…地下鉄東山線藤が丘行きに乗車し、本山駅で地下鉄名城線右回りに乗り換え、名古屋大学駅下車。所要時間約30分(乗換含)。
- JR金山駅・名鉄金山駅からの場合…地下鉄名城線左回りに乗車し、名古屋大学駅下車。所要時間約25分。



■航空機

- 中部国際空港から名鉄特急に乗車し、名古屋駅または金山駅で下車、その後地下鉄に乗り換え(上記参照)。又は、空港バスにて栄または名古屋駅に出て、地下鉄に乗り換え。

開催校からのお知らせ

- 土曜日は学生食堂や生協が利用できます(14時まで)。日曜は利用できませんが、名古屋大学周辺にはレストランがいくつかあります。
- 学内の会場となる建物の近くにコンビニがあります。
- 名古屋名物も参戦しての懇親会となりますので、どうぞ奮ってご参加ください。
- 学会用の駐車スペースは用意されていませんので、公共交通機関をご利用ください。

大会進行表

第1日目 10月29日(土)

1. 開会式 [文学部237講義室] 13:30～13:40
 開会の辞 支部長 武田 悠一
 会場校挨拶 名古屋大学文学研究科長 羽賀 祥二
2. 総会 [文学部237講義室] 13:40～13:55
3. 特別講演 [文学部237講義室] 14:00～15:00
 遠い他者の声——古典と海外文学について——
 講師 作家 諏訪 哲史
4. 研究発表 15:30～17:30
 第1室 [文学部127講義室] イギリス文学・文化
 第2室 [文学部128講義室] イギリス文学・文化
 第3室 [文系共同館2B講義室] アメリカ文学・文化
 第4室 [文学部129講義室] 英語学
 第5室 [文系共同館2A講義室] 英語学
5. 懇親会 17:45～19:45
 名古屋大学生協南部食堂2階 会費4000円

第2日目 10月30日(日)

1. シンポジウム 10:00～12:30
 第1室 (英米文学) [文学部237講義室]
 語りの〈新しい〉可能性
 司会・講師 大石 和欣(名古屋大学准教授)
 講師 富山太佳夫(青山学院大学教授)
 梶原 克教(愛知県立大学准教授)
 松下千雅子(名古屋大学准教授)
- 第2室 (英語学) [文学部127講義室]
 最先端言語理論による文法におけるインターフェイスの探求
 司会・講師 大室 剛志(名古屋大学教授)
 講師 岡崎 正男(茨城大学准教授)
 森田 順也(金城学院大学教授)
 田中 智之(名古屋大学准教授)
2. 閉会式 [文学部237講義室] 12:40～12:50
 閉会の辞 副支部長 平林美都子

研究発表一覧

10月29日(土) 15:30～17:30

第1室 [文学部127講義室]

司会 楚輪 松人 (金城学院大学教授)

1. 2階のベッドルームの「苦悩」
—スクリーンのロマン主義小説—
筑波大学 教授 今泉 容子
2. 「見る」ことと「語る」こと
—ヒロイン、ジェイン・エアを考える—
名古屋女子大学短期大学部 教授 杉村 藍

司会 川津 雅江 (名古屋経済大学教授)

3. Rethinking Orientalism in “It-Narratives”:
Crébillon’s Gossiping Sofa and the
Doctrine of Metempsychosis
Taiwan National University 准教授 黄 淨慧
4. Wordsworth and Natural Theology
南山大学 准教授 Ve-Yin Tee

第2室 [文学部128講義室]

司会 水野江依子 (名古屋工業大学准教授)

1. Samuel Johnson『簡約英語辞典』
—Johnsonの関与について—
名古屋学院大学大学院 博士後期課程
片野 正人

司会 角田 信恵 (聖徳学園岐阜教育大学教授)

2. *The English Woman’s Journal* からみる
ヴィクトリア朝の女子教育
愛知県立大学大学院 博士課程後期
小栗 節代
3. “The Fisherman and His Soul”における
「宿命の女性」像
名古屋大学文学研究科 博士課程後期
森 彩香

第3室 [文系共同館2B講義室]

司会 William Purcell (南山大学教授)

1. Horace & Henry James: A Reappraisal of
the *Carpe Diem* Theme in “Daisy Miller”
南山大学英語教育センター 講師
Mauro Lo Dico

2. Herman Melville の “The Bell-Tower” に
見られる美の追求と男性支配

愛知大学 助教 林 姿穂

司会 中田 晶子 (南山大学短期大学部 教授)

3. “Wunderkind”に見る1930年代のアメリカ
愛知学院大学非常勤講師 岩塚さおり
4. 『小公子』、『小公女』、『秘密の花園』
—フランシス・ホジソン・バーネットの
児童文学における「子供像」の変遷—
金城学院大学大学院 博士課程前期 太田妃早子

第4室 [文学部129講義室]

司会 鈴木 達也 (南山大学教授)

1. A Syntactic Study of English Middle
Constructions
名古屋大学文学研究科 博士課程後期 馮 爽

司会 石川 一久 (愛知学院大学教授)

2. イディオム表現 would rather の統語構造
に関して
名古屋大学文学研究科 博士課程前期
毛利 優一
3. カラにならない from, fromにならないカラ
信州大学高等教育研究センター 教授
加藤 鉦三
信州大学全学教育機構 准教授
奉 鉦京

第5室 [文系共同館2A講義室]

司会 都築 雅子 (中京大学教授)

1. 軽動詞構文について
名古屋大学文学研究科 博士課程後期
久米 祐介
2. Be動詞 + 不定詞の“意味”
信州大学人文科学研究科 修士課程 赤羽 佑太
信州大学人文科学研究科 修士課程 上條 智緩

特別講演・要旨

10月29日(土) 14:00～15:00

遠い他者の声 ——古典と海外文学について——

講師 諏訪哲史 (作家)
司会 滝川 睦 (名古屋大学教授)

思えば僕はこれまで「遠い文学」ばかりを読んできた。それは「空間」的に遠い海外の他言語文学と、「時間」的に遠い本邦の古典、つまり近代以前の日本の文学とをである。もちろん海外の古典はさらに僕らから「遠い」。それら遠い文学だけが、僕の創作に影響を与えて来た気がする。遠いものはそれだけ、より自分にとって「他者」であるからだ。同時代文学を毛嫌いする僕の性分は、たぶん恩師の種村季弘から受け継いだ反時代的嗜好のせいだが、足元にある現代の文学は「現代を反映している」などというだけで評価され、百年後に残るかどうかという基準では批評されていない。言語芸術としての音楽性や詩性、思想性がなんら読まれていない。要するに社会風俗資料として評価されることが現代文学を蝕み、焦った新人は傾向と対策で現代風俗を反映させようとし、なま物のように腐りやすい駄作ばかりを量産する。同時代を軽蔑し、反時代に眼を向けること。それが僕らのフィールドを広くする。僕が読んで感銘を受ける作品はすべて同時代を感じさせないものである。自分の同級生や学校の後輩が書いたような身近な作文にどうして感銘できようか。それは既知のものである。ゆえに新しそうなものこそが新しくないのである。真に新しいものは「遠く」「古い」。それを僕らは知らねばならない。21世紀の文学は僕らにはまだ要らない。20世紀以前の文学こそ必要である。そこにこそ他者は存在し、僕らの感覚をかき乱してくれるのであるから。

研究発表・要旨

10月29日(土) 15:30～17:30

第1室 [文学部127講義室]

司会 楚 輪 松 人 (金城学院大学教授)

1. 2階のベッドルームの「苦悩」——スクリーンのロマン主義小説——

筑波大学 教授 今 泉 容 子

ベストセラー小説は、映画化される。

ロマン主義小説の傑作である『フランケンシュタイン』も『嵐が丘』も、それぞれの映画一号作品がつくられたあと、くり返しリメイクされてきた。『フランケンシュタイン』のヴィクター・フランケンシュタインと『嵐が丘』のヒースクリフは、ロマン主義の主人公にふさわしく、死にいたる「苦悩」を体験する。その「苦悩」は、「雨」の降る「真夜中」に「2階のベッドルーム」で頂点に達する。

本発表では、数多くの映画作品を引用しながら、「2階のベッドルーム」というトポスが、ロマン主義小説から映画に変換されるとき、どのような変質を遂げるかを解明したい。

2. 「見る」ことと「語る」こと ——ヒロイン、ジェイン・エアを考える——

名古屋女子大学短期大学部 教授 杉 村 藍

シャーロット・ブロンテが小説家になる以前、画家として生計を立てたいと考えていたことはよく知られており、実際にプロの画家たちに混じって絵画展に作品を出品したこともあった。そうした彼女の絵画に対する強い関心は、その後に執筆された小説作品にもさまざまな形で投影されている。彼女の出版第一作となった『ジェイン・エア』(1847)にもその影響が随所に見られ、作品冒頭に登場するビューイクの『英国鳥禽史』の挿絵に始まり、ジェイン自身が水彩で描いた三枚の空想画や登場人物たちの肖像画など、多くの絵やスケッチが登場する。本発表では、こうした視覚芸術と、語り手でもある小説のヒロイン、ジェインとの関連について考える。

司会 川 津 雅 江 (名古屋経済大学教授)

3. Rethinking Orientalism in “It-Narratives”:

Crébillon’s Gossiping Sofa and the Doctrine of Metempsychosis

Taiwan National University 准教授 黄 淨 慧

This paper deals with the conjunction of sexuality and exoticism in Crébillon’s *The Sopha* (1742) in critical dialogue with *Arabian Nights’ Entertainments* and libertine culture. Having “objects” instead of human beings as the narrator, the episodic and open-ended “it-narratives” had been dismissed for falling short of psychological sophistication and failing to offer a schematic resolution. However, it is precisely such characteristics that contribute to its popularity. What distinguishes “it-narratives” from similarly loosely structured picaresque novels is the “transmigration” framework. While seemingly perpetuating the “Orientalist” stereotypes of whimsical triviality and luxuriant excess in Eastern courts, the hybrid

of such “Western” literary conventions as *roman à clef* and *chronique scandaleuse* and the supposedly heretic doctrine of body-shifting transmigration in *The Sopha* reveals the contingency of subject/object distinctions. The ambiguous status of such furniture pieces as sofas and settees which are intimate and yet detached onlookers of human affairs is analogous to that of a modern subject caught up in the forces of market mechanism and the commodification of sexuality. The performance of Amanzei as a courtier, moralizer, story-teller, gallant, sofa, and the double of Scheherazade further exemplifies a freedom of role-playing which testifies to the lasting appeal of “it-narratives” well into the nineteenth century.

4. Wordsworth and Natural Theology

南山大学 准教授 Ve-Yin Tee

There is general agreement that *The Excursion* found ‘its most appreciative audience’ in the middle decades of the nineteenth century. In 1837, the poem provided the occasion for one reviewer to notice ‘[the] long and scornful probation which Wordsworth has endured ... till the heart of England has been in some measure converted to his poetical religion’. By 1845, the sea change was accepted even by the cynical Thomas De Quincey, and he came to be referred to simply as ‘the great poet of the *Excursion*’. Kenneth Johnston’s memorable description of the poem as that ‘Victorian epic’ which Wordsworth ‘gave ... to the Romantics’, hints at the ideological dimension of the phenomenon. This paper examines more closely this correlation between poem and public that took place during the Victorian period. I will juxtapose Whewell’s *Astronomy and General Physics Considered with Reference to Natural Theology* (1833) with *The Excursion* and argue that natural theology was what brought the poem firmly into the ambit of the Victorians. I have been struck throughout by the coincidences between natural theology and environmentalism, on the one hand, and the coincidences between the Victorian mindset and ours on the other. My ultimate objective is to contribute to environmental thinking by revealing how our ecological consciousness has been both enabled and disabled by this formidable inheritance.

第2室 [文学部 128講義室]

司会 水 野 江依子 (名古屋工業大学准教授)

1. Samuel Johnson —『簡約英語辞典』へのJohnsonの関与について—

名古屋学院大学大学院 博士課程後期 片 野 正 人

Samuel Johnsonによる *A Dictionary of the English Language* [以下「親版」] 第1版が1755年に出版され、翌年簡約版 (the abstracted edition) が出版された。簡約版の表紙に “Abstracted from the Folio Edition, By the Author SAMUEL JOHNSON, A.M.” とあり、The Prefaceにも Johnson が簡約版の刊行目的を述べていることから、簡約は Johnson が行ったとされている。しかし、親版と簡約版との照合の結果、簡約の内容はアルファベットごとに簡約の原則が不統一であり、Johnson 1人が簡約を行ったとは考えられない。本発表では、アルファベットごとの簡約の偏りを明らかにするとともに、Johnson の簡約版編集への関与について考察する。



司会 角 田 信 恵 (聖徳学園岐阜教育大学教授)

2. *The English Woman's Journal* からみるヴィクトリア朝の女子教育

愛知県立大学大学院 博士後期課程 小 栗 節 代

The English Woman's Journal (以下 *EWJ* とする) 1858-1864 は、イギリスの女性問題を取り上げたヴィクトリア時代を代表する定期刊行物である。Barbara L. S. Bodichon は、女性の経済的・政治的諸権利の実現のための女性解放運動の重要課題として女子高等教育に取り組むべきであると考え、Bessie R. Parkes と女性たちを啓蒙するために *EWJ* を発刊した。ここでは、*EWJ* での論文、記事、報告などから Bodichon たちがヴィクトリア朝の女子教育をどのように捉えていたのか分析・考察したい。

3. “The Fisherman and His Soul” における「宿命の女性」像

名古屋大学文学研究科 博士課程後期 森 彩 香

Oscar Wilde が “The Fisherman and His Soul” (1891) において描いた、人魚が住む海の世界と魔女が住む陸の世界との対比は、誘惑する二人の女性の対比でもある。Matthew Arnold の “The Forsaken Merman” (1849) では、海に住む者たちは肉感的であり「心」と結びつき、そして陸とは道徳的な抑制そしてキリスト教的な道義心が働く場所であった。それに対しこの作品では、心と切り離された魂が陸地で罪を重ねることで、Arnold の枠組みにひねりが加えられている。つまり、道徳心によって統べられるはずの陸が、罪に満ち溢れた場所となり、魔女の棲む魔窟となっている。しかし、海にも Siren を彷彿させる人魚の誘惑がある。これら二様の誘惑する女は、ヴィクトリア時代特有の「宿命の女性」の系譜に属する。本発表はそうした「宿命の女性」像の特異性に焦点を合わせる。

第3室 [文系共同館2B講義室]

司会 William Purcell (南山大学教授)

1. Horace & Henry James: A Reappraisal of the *Carpe Diem* Theme in “Daisy Miller”

南山大学英語教育センター 講師 Mauro Lo Dico

This presentation will re-examine the famous *Carpe Diem* theme of the classical Latin poet Horace in “Daisy Miller” by Henry James. The presence of the Roman’s works throughout the Jamesian canon will first be established. The focus will then narrow to Horace’s Odes I.11, the origin of the *Carpe Diem* theme, and its influence on James’ novella in particular, notably its organization, setting, and theme. With regard to the first of these three aspects, the division of the short novel into four parts will be compared to the same number of books of Horace’s Odes. Next the setting of Rome and how two of its ancient monuments, the Colosseum and the Aurelian Wall, conjure the classical maxim *Carpe Diem* will be analyzed. Finally, the title character’s nickname, and the innocence it implies, will also be studied as it further dovetails with this Horatian theme which constitutes a long tradition that includes Ben Jonson’s The Devil is an Ass (“Flowers, / Though faire, are oft but of one morning” [I.vi.128-29]) and Robert Herrick’s To the Virgins, to Make Much of Time (“Gather ye rosebuds while ye may,” [84]).

Two main conclusions can be drawn from these observations: first, they provide the source for what is known in Jamesian literary criticism as the theme of “awareness that comes too late,” which appears not only in “Daisy Miller,” his first popular success, but in many of his other works as well; second, the author’s Horatianism helps him to criticize late 19th century gender roles, as represented by Fredrick Forsyth Winterbourne and Annie P. Miller, and how they were needlessly complicating courtship.

2. Herman Melville の “The Bell-Tower” に見られる美の追求と男性支配

愛知大学 助教 林 姿 穂

“The Bell-Tower” に登場する Bannadonna と Nathaniel Hawthorne の “The Artist of the Beautiful” に登場する Owen Warland においては、幾つかの共通する美の信念が見られる。両者は機械技師として機械に生命を吹き込むこと、有機体と機械を融合させることで被造物が生物同然になることに達成感を見出している。両者を比較しながら Bannadonna が複製を禁ずる「芸術の掟」を説きつつも、自動仕掛け人形を作った矛盾、あえて不吉な表情をもつ女性像を彫刻したその理由を明らかにし、Bannadonna の死が事故死ではなく美の追求の限界を感じた故の自殺だった可能性について検証したい。

司会 中 田 晶 子 (南山大学短期大学部 教授)

3. “Wunderkind” に見る 1930 年代のアメリカ

愛知学院大学非常勤講師 岩 塚 さおり

Carson McCullers の短編小説の中の一作品、“Wunderkind”(1936年)は、15歳のヒロイン Frances が、ドイツ系二世のピアノ教師ビルダーバッハから “Wunderkind(神童)” と呼ばれ、有望なピアニストになるべく練習に励んでいたが、ある時突然、先生が期待するように弾けなくなって先生の家から飛び出していくという物語である。一見、思春期の少女が、自分の能力の限界と先生の期待との狭間で苦しむ姿を描写した物語と読めるが、この作品の時代背景に焦点を当てると全く異なる読みが出来るのではないだろうか。

本作品が書かれたのは、経済不況にあえぐ米国にドイツ・ナチ党に追われたユダヤ人が流入し始めた頃であり、その時代を反映するかのように作品中にフランスのライバル、天才バイオリニストでユダヤ人のみずばらしい少年ハイメが登場する。また、ドイツ系のピアノ教師の大きな期待に圧倒されながら、フランススが苦戦する曲はベートーベンのピアノソナタである。これらの点に着目すると、マッカーズはフランススをドイツの軍勢力に怯える米国と重ねながら本作品を書き上げたのではないだろうか、考察したい。

4. 『小公子』、『小公女』、『秘密の花園』

—— フランシス・ホジソン・バーネットの児童文学における「子供像」の変遷——

金城学院大学大学院 博士課程前期 太 田 妃早子

生前、バーネットを一躍有名にしたのは1886年出版の『小公子』であった。主人公セドリック・エロルの愛らしい姿と謙虚で逆境の中でも慈悲を忘れない心が当時の大人たちに受けたのだが、それは中世より続く「小さな大人」としての「子供像」である。1905年の『小公女』に出てくるセーラ・クルーも凡そ本質的には同じだ。一方で、1911年の『秘密の花園』の主人公メアリー・レノッ

クスは、最初は気難しく我儘で「つむじ曲がり」(contrary)な少女である。前二作品とは正反対の主人公を作りだしたバーネットのこの三作品を通しどのような「子供像」の変遷があったのか、本発表でとりあげていきたい。

第4室 [文学部129講義室]

司会 鈴木 達也 (南山大学教授)

1. A Syntactic Study of English Middle Constructions

名古屋大学文学研究科 博士課程後期 馮 爽

In this presentation, based on the semantic and syntactic characteristics of English middle constructions, I try to conduct an alternative syntactic study of this special type of sentences. First, I propose that middles are generic statements that generalize over events. Based on the discussions on “ability and involuntary-action” forms in Tagalog which parallel to English middles, I argue that the implicit argument is projected in the specifier position of AspectP, which is assigned Experiencer θ -role by the [+telic] Aspect. Secondly, with vP-shell theory, I propose that the superficial subject in middles is base-generated in the specifier position of vP and is assigned Cause θ -role by v. As a result, not only the Patient middles but also the Adjunct middles can be given a unified syntactic account. It is shown that the two proposals can work together to provide a syntactic account for the three constraints on middle formation, namely, the Affectedness Constraint, the Aspectual Restriction and the Responsibility of the Subject.

~~~~~  
司会 石川 一久 (愛知学院大学教授)

### 2. イディオム表現 would rather の統語構造に関して

名古屋大学文学研究科 博士課程前期 毛利 優一

英語学の研究の中で、副詞に関してはこれまでその文法化について、また統語的位置づけについてなど、様々な研究がなされてきた。中でも副詞 rather については、歴史コーパスをもとにしたその意味変化がこれまでの研究では主になされてきた。しかし、rather を伴ったいわゆる慣用表現について、特にその統語的位置づけの説明はこれまであまりされてこなかった。本発表では、rather のイディオム表現として知られている would rather についてその先行研究、そして rather の意味変化を主に歴史コーパスによって概観することで考察し、最終的にその統語構造を提案したい。

### 3. カラにならない from, from にならないカラ

信州大学高等教育研究センター 教授 加藤 鉦三  
信州大学全学教育機構 准教授 奉 鉦京

日本語では「ドアから入る」は全く普通の言い方である。しかし、英語ではこのカラにあたる from を使って to enter from the door とは言えない。一方、英語で he died from cancer. と from を使う場合に、日本語で「がんから死んだ」とは言えない。このように、日本語のカラと英語の from は、少なくとも守備範囲の違いがある。カラという助詞と from という前置詞は、もちろん語彙の意味は

あるものの、実は【他の助詞・前置詞の意味分布によって決められている】という部分が大きいという前提に立ち、その「他の助詞・前置詞の分布」が日英語で当然違っているため、結果としてカラと from で用法が違ってくる、という可能性を本発表では追求したい。

## 第5室 [文系共同館2A講義室]

---

司会 都 築 雅 子 (中京大学教授)

### 1. 軽動詞構文について

名古屋大学文学研究科 博士課程後期 久 米 祐 介

現代英語の口語表現には、haveが不定冠詞aと動詞の語幹と同形の名詞を後続させる have a walkのような軽動詞構文がある。Walkの他に swim、look、think、talk など様々な名詞のタイプが軽動詞構文の補部に現れる。しかし、全てのタイプが許されるわけではなく arrive、cross over、see、know、speakなどは軽動詞構文の補部に現れることはできない。本発表では、歴史コーパスから得られたデータを分析することによって軽動詞構文の発達過程と have の軽動詞への文法化の過程を統語論、意味論の観点から議論し、補部に現れる名詞のタイプに新たな分析を提案する。

### 2. Be動詞＋不定詞の“意味”

信州大学人文科学研究科 修士課程 赤 羽 佑 太

信州大学人文科学研究科 修士課程 上 條 智 緩

不定詞のなかでも特に用法、分類があいまいであるとして有名なものがBe動詞＋不定詞である。日本語でのこの用法は一般的に次の5つに細分化されている。1、予定・運命「～することになっている、運命である。」2、命令「～しなさい」3、可能「～できる」4、当然・義務「～しなければならない」5、意図「～するつもりである、～したい」これらの用法はコンテキストに依存するといわれることが多い。今回の発表ではこの五つの用法がどのように意味付けされどのように分類されているのか、そもそも五つに分類するのは正しいことなのかをそれぞれの分類を明確化させつつ追求していく。

# シンポジウム・要旨

10月30日(日) 10:00～12:30

## 第1室 (英米文学) [文学部237講義室]

### 語りの〈新しい〉可能性

司会・講師 大 石 和 欣 (名古屋大学准教授)  
 講師 富 山 太佳夫 (青山学院大学教授)  
 講師 梶 原 克 教 (愛知県立大学准教授)  
 講師 松 下 千雅子 (名古屋大学准教授)

1980年代において〈語り〉についての議論は出尽くした感もあり、今さら何をという思いがないわけではない。しかし、30年ほど経ってみると新たに考えるべき話題や題材もあるように思う。

語ることは文学の本質であるが、とうの昔に〈語り〉は文学研究の特許物でも、免罪符でもなくなってしまった。研究領域の拡大、正確に言えば拡散にともない、考察対象としての〈語り〉は多様化と混迷を増してきている。心理学や歴史学はもちろんのこと、さらに近年ではジェンダー学やフィルム・スタディーズにおいて〈語り〉の意味を解きほぐす新たな試みが注目を集めている。その行き着く先はどこに向かっているのだろうか？わたしたちは〈語り〉の〈新しい〉可能性をどう切り開いたらいいのだろうか？

本シンポジウムでは21世紀における〈語り〉の研究動向を探りつつ、文学領域において〈語り〉を考える意味も問い直してみたい。クィア批評や視聴覚メディア、歴史学の領域における最先端のアプローチ、「美学的転回」や「受容の美学」という刺激的なコンセプトを機軸にして分裂する〈語り〉の多様性を追究する。

### セクシュアリティと物語の快樂

名古屋大学 松 下 千雅子

クィア批評において、物語に隠された同性愛的欲望を明るみに出す「アウトティング」がしばしば行われてきた。これは一見、解放主義的だが、見つけられた同性愛者は、正常な異性愛/異常な同性愛という不平等な二項対立に回収される危険をとまなう。「クィア」という批評用語が文学研究に導入された背景には、こうした二元論を脱構築する意図があったはずなのに、なぜこうなったのか。クィアな欲望の普遍化や文学史の再構築など、積極的な意図もあるだろうが、私は「アウトティング」を、バルトが指摘した物語の快樂と関連づけて考えたい。セクシュアリティに関する〈語り〉の構造を探ることにより、それが読者にもたらす効果を捉え直したいと思う。

### 視聴覚メディアにおける語りのポジション

愛知県立大学 梶 原 克 教

映画のように視覚と聴覚に関わるメディアにおける〈語り〉は、小説のような文字を媒体とした〈尾語り〉といかに異なるのだろうか。新たに考慮に入れるべき変数は存在するのか。存在するとすれば、それはいかなるものか。

物語論を中心に据えた David Bordwell らの研究と、それにしばしば対比される Jean-Louis Baudry の「装置理論」および精神分析学的研究を軸に、フィルム・スタディーズにおけるひとつのコンテクストを概観しながら、同一化、感情移入、没入といった側面を意識しつつ、映像メディアにおける〈語り〉のポジションを考察したい。同時に、Laura Mulvey や Mary Ann Doane らいわゆるフェミニズム批評家らがゼロ年代に見せた「美学的転回」の意味も追求できればと思う。

## 亡霊たちの語り —— ハムレット、マキューアン、ゼーバルト ——

名古屋大学 大石 和 欣

墓場、遺跡、廃墟、あるいは閉ざされたままの部屋には過去の時間が眠っている。そこをこじ開けると、時の深淵がぱっくりと口をあけて歴史が顔をのぞかせる。父王の亡霊と邂逅したハムレットのエピファニーとも言えるし、プルースト的な記憶の間歇でもあろう。意識の背後にある暗室でじっと息を潜めていた過去の残像が、ささいな出来事を契機にして、脳裡に浮上し、揺動しながら波紋を広げていく。クロノスの時間へのカイロスの時間の乱入、現実の認識を錯乱させる記憶の蘇生。それは過去を語る際に不可避免的に付随する現象でもある。

本発表では、歴史学における物語研究を念頭において過去を〈語る〉ことの意味を問い直してみたい。その上で第二次世界大戦の記憶を語ることの問題を、関連する文学作品や視聴覚メディアとともに解きほぐしてみたい。記憶と人間存在、過去と現在、歴史学と文学とが交錯する領域に分け入りながら、その接点を言説とイメージ・映像の双方から探ることで語りのあり方を探索してみたい。

## 語りの流動性

青山学院大学 富山 太佳夫

文法や修辞学の視点からすると、〈語り〉のあり方はそれなりに分類可能なものかもしれないが、現実の人間関係の中で機能する〈語り〉については、そんな単純な割り切り方はできないように思われる。

『ロビンソン・クルーソー』からオースティン、ブロンテ姉妹、ディケンズの小説等、議会の議事録、ストリート・バラッドに至るまでのあれこれの言説から特徴的な〈語り〉を抜き出してその多面性を考察してみようと思う。それと同時に、そうした〈語り〉の多面性がどのようなコンテクスト〈関係性〉の中で産出され、どのような可能性を誘発するになるのかも考えてみたい。そのさいに、受容者（読者や観客）の関与のあり方についても、受容の美学を踏まえて、考えてみたいと思う。

## 第2室 (英語学) [文学部127講義室]

## 最先端言語理論による文法におけるインターフェイスの探求

|       |         |            |
|-------|---------|------------|
| 司会・講師 | 大 室 剛 志 | (名古屋大学教授)  |
| 講師    | 岡 崎 正 男 | (茨城大学准教授)  |
| 講師    | 森 田 順 也 | (金城学院大学教授) |
| 講師    | 田 中 智 之 | (名古屋大学准教授) |

言語は音声と意味を結びつける仕組みである。言語を扱うには、音声に関わる側面を扱う音声学や音韻論、語の仕組みを扱う形態論、文の形式構造を扱う統語論、意味を扱う意味論が少なくとも必要である。しかし、これらの言語の4つの部門は、別個にバラバラに存在しているわけではなく、部門の一部をいわば窓口にして互いの一部の情報を交換し合っている。本シンポジウムでは、各4つの部門を専門に研究されている講師4人に登場していただき、各部門間の接点(インターフェイス)にかかわる具体的な言語事象を取り上げ、分析してもらい、その分析を通してどのような理論的意味合いを各部門間の接点にたいしてもたらすかを4人の研究者が依拠している最先端生成言語理論の立場から議論することで、文法におけるインターフェイス研究の今後の発展に貢献したいと考える。岡崎講師には、生成音韻論の立場から、音韻と意味のインターフェイスを論じてもらい、森田講師には、分散形態論の立場から、形態と統語のインターフェイスを論じてもらい、田中講師には、ミニマリズムの立場から、統語と音韻のインターフェイスを論じてもらい、大室講師には、動的な概念意味論の立場から意味と統語のインターフェイスを論じてもらうことにする。

## 音韻と意味のインターフェイス

茨城大学准教授 岡 崎 正 男

本発表では、文の韻律構造の決定要因は何か、という古くて新しい問題について、文の意味構造と韻律構造のインターフェイスの視点から論じる。

文の韻律構造の決定要因については、1970年代初期に主として統語構造との関連について活発な論争があり、その後、1980年代から1990年代にかけて、文の韻律構造と文の情報構造および話者の前提や感情との関連も考慮にいたしたさまざまな論考が出版された。そして、最近の10年間は、統語理論の発展にともない、再び文の韻律構造と統語構造の関係が注目され、活発な研究活動が行われている。

このような状況のもとで、本発表では、文の韻律構造には、意味構造に基づき決定される側面があることをゲルマン諸語の言語事実をもとにして明らかにし、同時に、ゲルマン諸語とロマンス諸語で文の韻律型に差異がある要因と最近の統語構造に基づく分析の是非について検討を加える。

## 形態と統語のインターフェイス —— 名詞化を例として分散形態論の立場から ——

金城学院大学教授 森 田 順 也

形態論と統語論の相互作用を特徴づけるために、従来様々な議論がなされてきた。1980年代中頃までの主流を形成する考えは、派生形態論は語彙部門で捉え、屈折形態論は統語部門及び音声形式部門で捉えるというものであった。屈折形態論の文法全体に占める位置については、その後も大方の意見は一致しているけれども、派生形態論については、その権限を統語部門へ移そうという

反語彙主義が台頭してきた。本発表の目的は、反語彙主義の代表である分散形態論 (Distributed Morphology: DM) の枠組みで英語の名詞化を分析することによって、形態-統語の相互関係の主要な側面を明らかにすることにある。DMの骨組み及び基本システム——1 節点仮説、後期挿入、競合——を概観した後 (Halle and Marantz (1994)、Embick (2010))、DM システムが名詞化現象をどのように捉えるかを提示する (Harley and Noyer (2000)、Morita (2007)、Embick and Marantz (2008))。

## 統語と音韻のインターフェイス —— 動詞と目的語の語順をめぐる ——

名古屋大学准教授 田 中 智 之

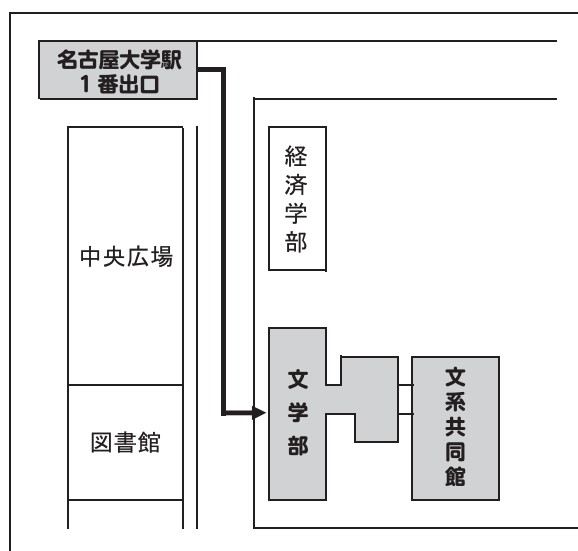
Chomsky (2000) 以降のミニマリスト・プログラムにおいては、統語部門で形成された構造が、位相 (phase) と呼ばれる単位ごとに音韻部門に転送されると仮定されている。したがって、統語論から音韻論への写像において統語構造がどのように線形化され、その際に位相という概念がどのような役割を果たすのかは、両者のインターフェイスに関する重要な問題の1つである。本発表では、そのような視点から統語構造の線形化について論じた Fox and Pesetsky (2005) を出発点として、動詞と目的語の語順、および目的語移動の可能性について考察する。その際、「動詞・目的語」を基本語順とするスカンジナビア語の目的語移動に関する彼らの分析に基づいて、「動詞・目的語」と「目的語・動詞」という2つの基本語順を持つ初期の英語の言語事実が、統語構造の線形化という問題に対してどのような帰結をもたらすのかを検証する。また、位相の役割に注目することにより、英語における「目的語・動詞」から「動詞・目的語」への語順の変化において、定形節と不定詞節が異なる歴史的変遷を辿ったことが説明されることを示す。

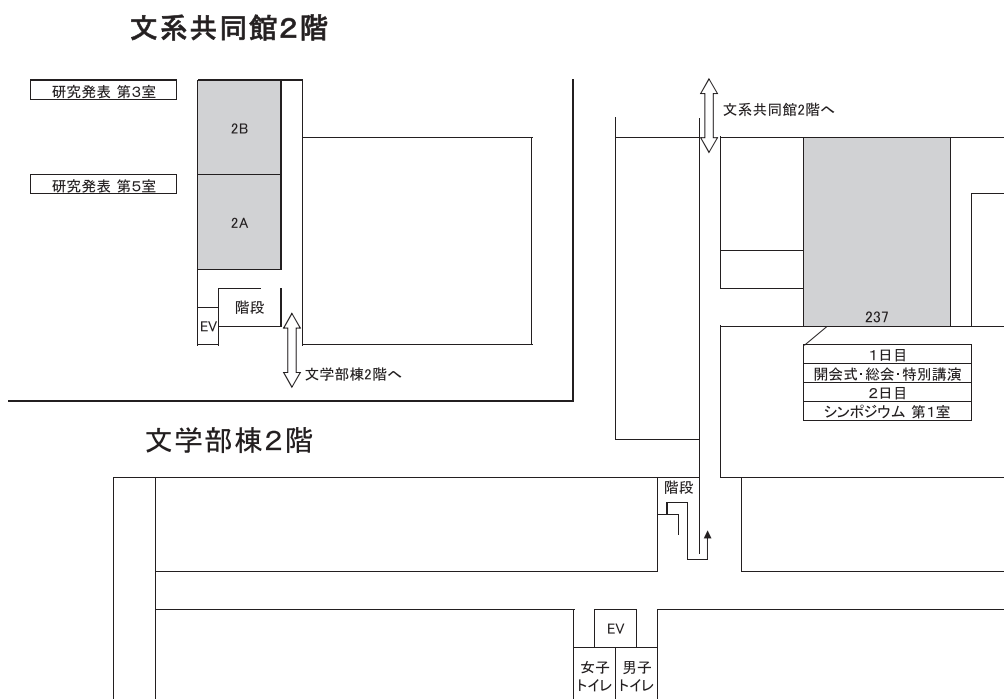
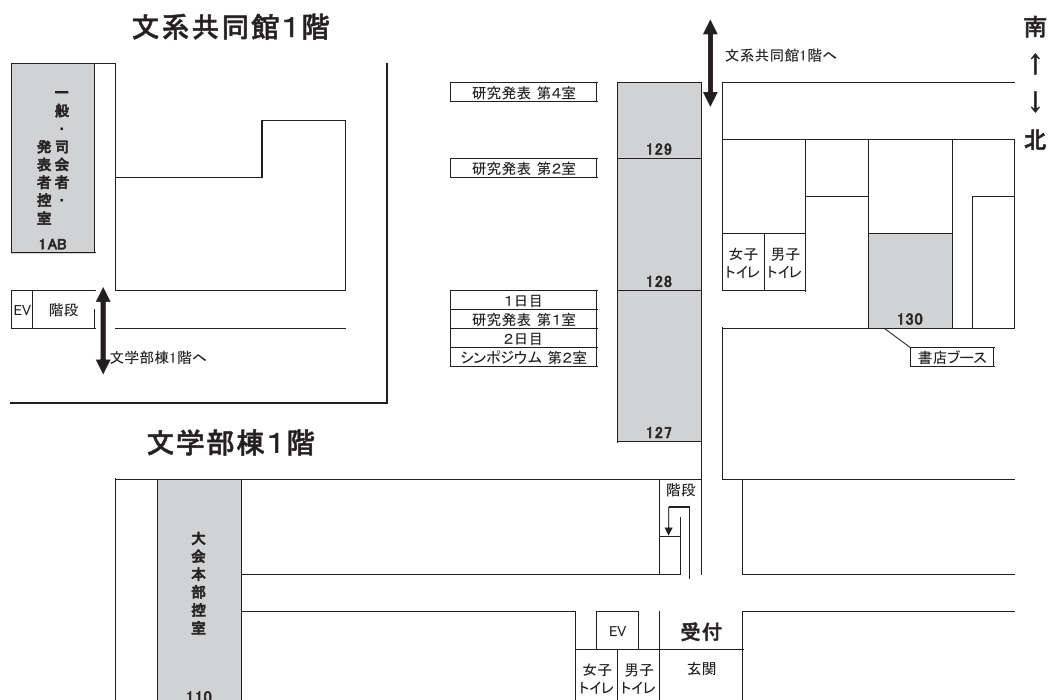
## 意味と統語のインターフェイス —— One's Way 構文を例として動的な概念意味論の立場から ——

名古屋大学教授 大 室 剛 志

意味と統語のインターフェイスの研究では、意味と形のミスマッチがその研究対象の1つとなる。この意味と形のミスマッチは、日本では早くから Kajita (1977) の動的文法理論で扱われてきたが、最近になって海外でもインターフェイス研究という明確な視点をもって、構文単位で解明され始めている (Jackendoff (1990), Goldberg (1995), Culicover and Jackendoff (2005) 等)。本発表では、Omuro (2003) で行った議論を基に、意味と形のミスマッチがかかわる英語の構文イディオム One's Way 構文を具体例として取り上げ、概念意味論の枠組みから Jackendoff (1990, 1992) が提示した語彙論的アプローチと構文的アプローチ、構文理論の枠組みから Goldberg (1995, 1996) が提示した構文的アプローチを詳細に比較、検討する。これらのアプローチによると One's Way 構文には大きな意味と形のミスマッチが生じていると捉えられることになるが、動的な概念意味論の立場に立ち、One's Way 構文をその中で更にサブタイプに分類し、それぞれのサブタイプを動的な法則で関係づけるというアプローチをとれば、徐々に意味と形のミスマッチの程度が進むのであって、いきなり大きな形と意味のミスマッチが生じているわけではないという新しい見方をとることが可能になると論じる。

## 会場案内図





- 文学部127, 128, 129, 130講義室、文系共同館1AB講義室：文学部玄関(受付)から、案内に従って1階を奥に進んで下さい。
- 文学部237講義室、文系共同館2A, 2B講義室：文学部玄関(受付)近くの階段を2階まで上がり、案内に従って進んで下さい。



# 日本英文学会関西支部 第6回大会

期日 2011年(平成23年) 12月18日(日)

場所 関西大学(千里山キャンパス)

## 日本英文学会関西支部

---

### 大会準備委員会

委員長：山本秀行(神戸大学)

副委員長：水野真理(京都大学)

委員

【英米文学部門】：坂本武(関西大学、開催校委員)、片渕悦久(大阪大学)、  
下楠昌哉(同志社大学)、武田美保子(京都女子大学)、福本宰之(龍谷大学)

【英語学部門】：梅原大輔(甲南女子大学)、田中裕幸(関西学院大学)

## 1. 会場：関西大学千里山キャンパス・第1学舎1号館

(〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35)

関西大学文学部 英米文学英語学専修 英文合同研究室気付 坂本武研究室

電話：06-6368-1121(代)[内5456]

## 2. 日時：2011年(平成23年)12月18日(日)

## 3. プログラム：

11:00 開会式

11:10 研究発表(昼食をはさんで午前の部と午後の部)

一般公募の研究発表者は現段階では未定です。

プログラムの詳細は11月に発表いたします。

15:10 シンポジウム

### ◆英米文学部門：英米文学とメディア

司会・講師：福本 幸之(龍谷大学・教授)

講師：野谷 啓二(神戸大学・教授)

講師：西垣 通(東京大学・教授)

講師：田口 哲也(同志社大学・教授)

### ◆英語学部門：認知メタファー理論はDeignanの批判にどのように応えるのか —言語と認知の乖離を超えるコーパス・メタファー研究の展望—

司会・講師：鍋島 弘治朗(関西大学・教授)

講師：大森 文子(大阪大学・准教授)

講師：谷口 一美(大阪教育大学・准教授)

講師：大石 亨(明星大学・教授)

17:40 総会・閉会式

18:30 懇親会

## 4. 招待発表者について

第3回大会より、招待発表者制度を導入し、英米文学と英語学の各分野においてご活躍中の先生方に「特別研究発表」をお願いしております。今回の第6回大会では、次の4名の方にご発表いただく予定です。

1) 服部 典之 (大阪大学・教授)

2) 須川 いずみ (京都ノートルダム女子大学・教授)

3) 山下 昇 (相愛大学・教授)

4) 宮本 陽一 (大阪大学・准教授)

これらの方々の研究発表タイトルについては、11月に発表する大会プログラム・研究発表要旨をご覧ください。